

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：32404

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520048

研究課題名（和文） 敦煌文献および四川石窟資料から見た道教・仏教の社会への受容と浸透

研究課題名（英文） Acceptance and Faith: the Formation and Evolution of the Syncretistic Zokukou Rituals, as Evidenced from an Examination of the Dunhuang Manuscripts and Sichuan Stone Cave Date

研究代表者

遊佐 昇（YUSA NOBORU）

明海大学・外国語学部・教授

研究者番号：40210588

研究成果の概要（和文）：唐代社会に「俗講」と呼ばれる仏教・道教にかかわる宗教儀式が行われていた。「俗講」に対しての研究が進んだのは、敦煌文献の中に「俗講」と関連していたと思われる寫本群が見つかったことによる。本研究は敦煌文献を資料に用いて、その分析を進めて道教の「俗講」存在とその変遷を考察し、さらにはその形成に四川地域が深くかかわっていたと仮説を立ててその形成過程への分析を進めた。

研究成果の概要（英文）：During the Tang Dynasty of China, Buddhist and Taoist rituals called “Zokukou (俗講)” were performed. Most of the previous studies on “Zokukou” are based on some “Zokukou” related manuscripts found in the Dun Huang historical documents. Based on this finding, the present study has two major objectives: 1) to examine Taoist “Zokukou” rituals and their transitions, based on the manuscripts of the Dun Huang documents; 2) to hypothesize that the Sichuan region deeply influenced the formation of Taoist “Zokukou” rituals and analyze the processes of its formation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：道教・敦煌学

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

## 1. 研究開始当初の背景

唐代社会で仏教・道教が社会に向けて宣教活動を行った一つの大きな行事として挙げられるのは俗講である。俗講は元来、勅令で寺観を開催の場として開かれていて、そこでは僧侶・道士により「経を講ずる」つまり講經が行われていたことが記録に残されている。その直接の資料と思われるものが敦煌文献中より発見されて、研究が進められ、その概要を見るまでに至った。その時期の成果として金岡照光『講座燉煌・第9巻・敦煌の文學文獻』1990年4月が挙げられる。ただ、その時点においては、敦煌文献の公開が限られたものであったことから、その後研究の一時停滞する状態を招いた。この時期の成果についてみても、ほとんどが仏教に関するものであり、道教についての研究は、ほとんどなされていないに等しい状態であった。また、仏教側の資料からではあるが、六朝以来、対社会的な宣教活動として、仏教・道教を通して「唱導」も伝統的に継続されてきており、この点についても仏教の研究がほぼその全体を占めるに近い状態であった。

近年になり、敦煌文献の公開度も、大いに進展があり、中国、台湾、日本の研究者を中心に、改めて敦煌文献を使用しての上記の事柄についての研究が進められるようになった。李小榮『变文讲唱与华梵宗教艺术』2002、于向东『敦煌变相与变文研究』2009、荒見泰史『敦煌講唱文學寫本研究』2010（広島大学、本研究の研究分担者）等によって活発な研究が進められており、その全体像の解明に向けて大きな展開を見せている。

道教に関しては、これまで敦煌文献中からも直接的、具体的な文献が発見されていなかったことに起因して、かつて那波利貞博士が周辺資料を綿密に集められて道教の“俗講”の存在を提示されて以降（「唐代における道教と民衆の

関係に就いて」甲南大学文学会論集17）、具体性を持つ研究は行われていない状態であったが、中国国家図書館蔵の敦煌文献中にそれと思しき文献 BD1219 の存在することが王卡『敦煌道教文献研究』2004 によって報告された。その後、周西波「敦煌写卷 BD1219 之道教俗講内容試探」

（第7届唐代文化討論会 2005）によって、その最初の内容に関する研究と録文が発表された。本研究代表者である筆者はそれに引き続き、周西波氏の録文が古い写真からの作成で、文字の不明な部分が多いことから中国国家図書館で善本部副館長田世民氏の協力を得て、直接写本自体を参照して録文を作り、研究を開始していた。（平成18年度科学研究・基盤研究C「敦煌文献中に見られる説話文学資料の基礎的研究」代表荒見泰史の分担研究者の研究成果として報告、平成21年3月）。

四川省の石窟、神像及び碑文に対する調査研究は、これまでそれらの窟が存在する場所が比較的交通の不便な場所が多いこと、中国側においても十分な調査が行われずにいた等の理由が重なって国外からの研究は進めにくい状態が存在していた。それでも中国側では地道に調査が行われていたようで、『四川文物』などの雑誌においてその様子が一瞥することができた。近年になって『大足石刻銘文録』1999年、『巴中石窟内容総録』2006年、『広元石窟内容総録・皇澤寺卷』2008年、『安岳石窟』2008年などの資料が続々と刊行されるにいたった。これは中国側の調査がある一定の整理ができた段階に達したことを意味していると同時に、外国人の研究者にとって刊行された資料に基づき現地における調査を含む研究の窓口が開けられたことを意味していよう。

## 2. 研究の目的

本研究は現在まで中国社会に継承されている仏教・道教に対する信仰が、唐五代期を中心どのような方法や経路をたどってどのように社会に浸透し受容されていったのかを、敦煌文献に残される仏教・道教の俗講及び唱導関連資料、更には四川省各地に散在する石窟群中に残される道教聖像等の研究を通して、これまで研究の少なかった道教を中心に、上記の事柄を解明することを目的とする。具体的には次の通りである。

(1) 道教の俗講に関する直接資料として、敦煌文献(北京國家図書館所蔵)のBD1219、BD7620の翻刻、さらには校録の作成を行う。それを直接の資料として、唐・五代期における道教の俗講の具体的様相、そしてその内容について当時の社会で行われていた具体的な道教信仰との関連について考察する。この際に当然必要なこととして、仏教の俗講、及び唱導の研究を把握し、比較しつつ進めて、それぞれの特徴、あるいは差異を明らかにしていく。

(2) 四川省の石窟群中、成都を中心とする地域において、現地調査を行う。具体的には、安岳県に複数ある石窟群(玄妙觀磨崖像、千仏寨磨崖造像、圓覺洞磨崖像等)、蒲江県の飛仙閣磨崖造像等であり、唐・五代時期の道教像が保存されている。これらの窟には、まだ十分に解明されていない碑文等の石刻の文字資料が残されている。この碑文等を可能な限り資料化することも重要と考えている。

## 3. 研究の方法

敦煌文献上に残される仏教・道教の布教を目的としたと思われる文書に対する新たな検討から始め、それと四川省各地に現存して残っている信仰の発露として制作された石窟、像、碑文等の文物との関連を比較検討して、布教と実際の社会での受容とを見ていくことから研究を進める。

(1) 敦煌文献については、現在、北京図書館で進められている同館蔵の寫本の修復作業を経て、『敦煌遺書』として刊行されている写真を再度確認し新たな資料の発見に努める。主たる方法としては、すでに道教の俗講に関連した資料であると確認しているBD1219とBD7620について、詳細に分析作業を進め、『道蔵』収録經典および仏教関連資料との照合を進めて、その俗講が形成され、その後変化をしていく過程の検討を行う。

(2) 四川石窟中の道教像については、現地を訪れ、その石窟の交通上の位置、都市および人々の住む集落との位置関係等を把握する。また、その像がいかなる神格であるのか、その周囲に

はいかなる神像が存在しているのか、および石窟全体の中でいかなる場所にあるのか等を現地調査で把握する。また、それらの像が敦煌文献中に残される唐・五代期の同時代文献といかなる関連を持つのかについて検討を加える。

## 4. 研究成果

敦煌文献のBD1219とBD7620を翻刻し、校録を作成して、本文について検討を加えた結果、新たな知見を得た。また、そこから更なる問題点を発見し研究を進めることができた。

(1) BD1219 文書の翻刻、校録を作成し公開した。また、その本文の検討から、全体の構成が1導入、2前段、3説話、4後段、5問答の5つの部分よりなることを分析し、俗講で用いられた台本ではあるが、円仁が『入唐求法巡礼行記』中に記録していた武宗の時期の俗講での内容と異なっていて、講經文と呼ぶにはふさわしくないこと、むしろ唱導文と呼ぶべき形式のものであることを提唱した。また、時代を後にしていること、俗講で演じる出し物は時間の推移の中で変化を起こしていることが考えられ、その変化の途中にある作品との仮説を立てるに至った。この点については、現在継続的に研究を進めている。

(2) BD7620の翻刻と校録を公開した。この寫本の内容を検討することから、「講經」の概念に時間の経過の中で、変化が起きていることを示すことができた。BD1219と合わせて検討することから、唐代の俗講での出し物、またその開講の性格に変化が生じていることが確かめられた。

(3) 四川省の石窟群に対する現地調査は、これまでに二度行った。現在その収集結果を蓄積中であり、社会での実際の信仰と俗講での布教とのつながりを検討している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

### ① 荒見泰史

「敦煌講經文類と『東大寺諷誦文稿』より見た講經に於ける孝子譚の宣唱」敦煌写本研究年報、第7号、査読無、2013、p.69-89

### ② 遊佐 昇

「道教と語りの世界」、明海大学大学院応用言語学研究科紀要応用言語学研究、査読無、No.15、2013、p.9-16

### ③ 劉 勳寧

「“支微入魚”的地理分布及分布及其成因」陝西師範大学学报、1期、査読有、2012、p.85-91

- ④ 荒見泰史  
「敦煌の唱導文學文献」、『項楚先生欣開八秩頌壽文集』中華書局、査読無、2012、p.48-61
- ⑤ 遊佐 昇  
「見之悲傷、念之在心—道教の唱導をめぐって」敦煌写本研究年報、査読無、第6号、2012、p.13-26
- ⑥ 遊佐 昇  
「道教と俗講—北京圖書館藏 BD7620 文書を中心に—」、査読有、東方宗教、百十七卷、2011、p.18-36
- ⑦ 遊佐 昇  
「老子降臨説話と青羊宮」、『日中言語文化研究』（白帝社）査読無、2011、p.389-411
- ⑧ 遊佐 昇  
「道教と唱導—BD1219 文書の検討から—」、明海大学大学院応用言語学研究科紀要応用言語学研究、査読無、No.12、2011、p.165-176

[学会発表] (計2件)

- ① 遊佐 昇  
「見之悲傷、念之在心」中国中世寫本研究班、2011年8月29日、関西大学
- ② 遊佐 昇  
「道教の講經」東アジア宗教文献研究集会、2011年3月10日、筑波大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

遊佐 昇 (YUSA NOBORU)  
明海大学・外国語学部・教授

研究者番号：40210588

### (2) 研究分担者

荒見 泰史 (ARAMI HIROSHI)  
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授  
研究者番号：30383186

劉 勳寧 (RYU KUNNEI)  
明海大学・外国語学部・教授  
研究者番号：90261750